

社会学「近代とは何か」
メディアスクーリング

担当 徐玄九

7

労働賛美の時代としての近代

—労働観の変遷—

前回のまとめ

共同体(集団)ではなく「個人」中心的な自然法思想を軸に、自然権を有するバラバラの個々人の「同意」と「契約」に法律や制度の正当性を求めた近代社会理論を取り上げた。社会契約や私的所有は、人間や物が共同体へ帰属しているときには、全面的に成立しない。これらの理論は正当性をもつためには、それまで共同体を構成していた人々がバラバラに分化して、全面的にアトム(原子)化してはじめて可能になる。

今回の主題

前回は、労働による生産行為とその対価である私有財産が絶対的な個人の権利として考えら得たことを学んだが、これをさらに深く理解するために今回は、古代から近代までの労働観の変遷を歴史的・思想的に辿りながら、労働こそが「絶対的価値」または、「人間の自己表現のための核心的な行動契機」と見なすようになった近代労働観の形成とその特徴を学ぶ。

KEYWORD

天職(beruf)

労働価値説

労働信仰

「労働觀」の変遷

周知の通り近代以降、資本主義であれ社会主義であれ、あらゆる国で「労働」は賛美されてきた。ほとんどの人が自らの人生の中で最も活動的な時期を働く時間にその相当の部分を費やしている。しかも「マジメ」にである。このような**「常識/当たり前」**も長い歴史からすればつい最近のことである。この「常識/当たり前」のもとにそれだけの時間を費やす人間の活動が、**どのような「意味」をもち、どのように「説明」されてきたか**ということを歴史的・思想的に辿りながら、自らの労働に対する考え方を再整理してみよう。

【主な参考・引用文献】

今村仁司『仕事』(弘文堂、1988年)

安江孝司『社会学』(法政大学通信教育部、1983年)

安江孝司『古代から現代への労働觀の変遷 : A・ティルゲル「労働思想史」概要』(労働調査協議会、1997年)

武田晴人『仕事と日本人』(ちくま新書、2008年)

1 古代ギリシャ・ローマの労働思想

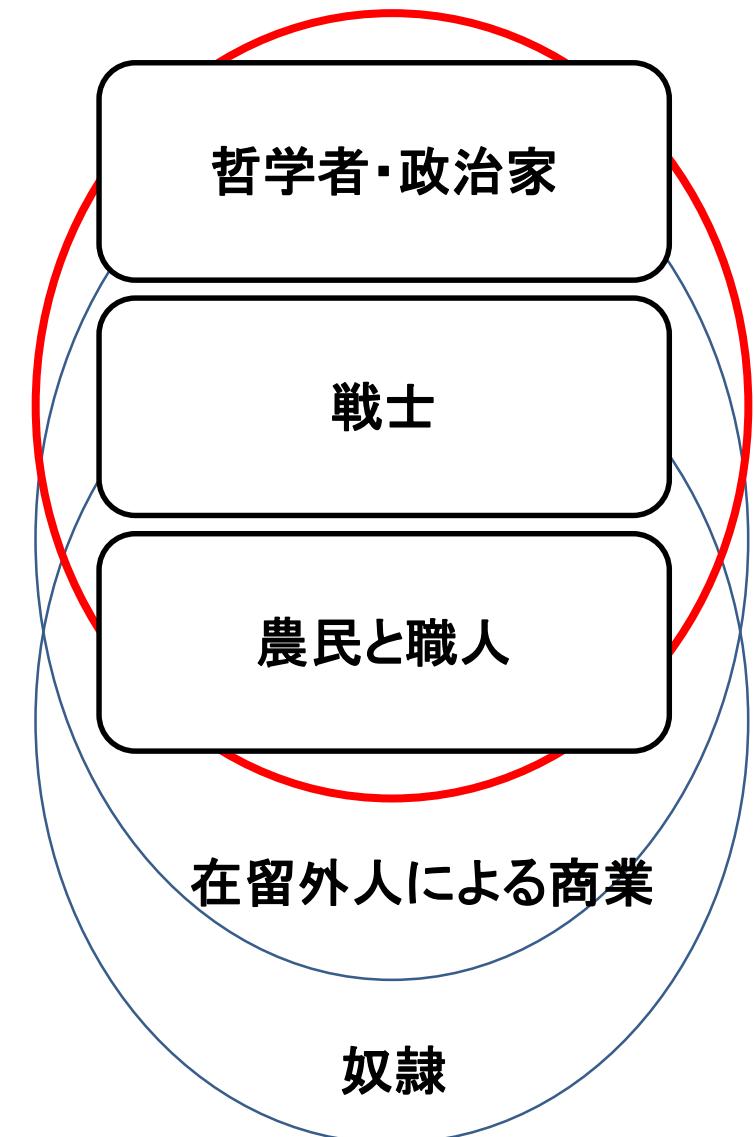
端的にいえば、古代ギリシャにおける労働とは、〈呪われた災禍〉以外の何ものも意味しなかった。

ギリシャ語「ポノス(Ponos)」、ラテン語「ポエナ(poena)」は、「**労役**」、「**労苦**」、「**重荷**」、「**罪に対する報い**」と同意。

ポリスを有形・無形に支える奴隸は、**言葉を話す動物(または道具)**であつて、ポリス共同生活から排除されていた。奴隸動労は最も非人間的労働であるが、これなしにはポリスの生活が立ち行かない。自由民が奴隸になるわけにはいかない以上、奴隸をどこから調達しなければならない。他国から奴隸を移入するほかなく、植民地戦争が不可欠となる。戦争は奴隸の再生産装置であるとともに土地の拡大手段であった。

労働は「奴隸」のすること

「ポリス共同体の三つの階層」



・古代ギリシャ的労働表象のなかで、「**多忙**」はひとつの「**倫理的悪**」であった。職人労働は「多忙」のゆえに「魂を育てる」ことができないからであり、「**余暇**(スコレー)」こそ自由人の本性にふさわしいとされた。余暇(多忙でないこと)は人間の魂を向上させ、世界を観望・観想させる余裕を作りだす。ちなみに「余暇はギリシャ語ではスコレー、ラテン語ではスコーラ、ドイツ語ではシューレ(学校)という。

- ・古代ギリシャの知識人たちには、哲学者こそ形相と目的の真の認識者であり、「哲学」は自由市民を「啓蒙」するものと考えていた。だからこそ奴隸の仕事であれ、職人の仕事であれ、肉体労働はすべて蔑視されるべきものであり、恥多い仕事、非人間的で卑しいものと見なされた。
- ・農業労働(生物的生命を維持するための労働)や職人労働(日常生活の必需品の制作)が不可欠であることを承認しつつも、これらの価値は少数の「自由市民」の活動に比べてはるかに低いものと位置付けることで自らのその「活動」と支配を正当化した。

① 詩人たちの見解

ⓐ**ホメロス**(生没はBC8~10世紀と推定。古代ギリシャの叙事詩人。『イリアス』と『オッデュッセイア』の作者)

「神は人間を嫌悪し、意地悪くも人間を咎め、それで人間は骨折りで難儀な労働に従事しなければならなくなつた。」

ⓑ**クセノフォン**(BC430頃~354頃、ギリシャの軍人、歴史家、哲学者)

「人間はそのことで生活必需品を得る代わりに、神の手により、痛苦を負わせられる身となつた。それが労働である。」

ⓒ**ヘシオドス**(BC700頃、古代ギリシャの叙事詩人。

「労働のない生活が至福の状態で、そうした幸せが、かつての〈黄金時代〉にはみられ、もしかすると多分、将来再び手にすることもあるかもしれないが、悲しいことに、いまは、神々が、人間にあいそをつかされ、食物を土壤の下に埋めてしまわれたので、人間は食べて生きてゆきたければ、まずそれを掘り出すことからはじめなければならない。」

② 哲人たちの見解

ⓐ プラトン (BC427~347、ギリシャの哲学者。ソクラテスの弟子、アリストテレスの師)

プラトンの思想には近代の経済思想と類似しているところもあるが、それは労働行為の社会的機能は一部みとめたが、それを絶対的な人間の価値として評価したのではない。プラトンにとって何よりも大事なことは真・善・美、理智といった理想の追求にあった。このようなプラトンの思想はアリストテレスに継承された。

ⓑ アリストテレス (BC384~322、ギリシャの哲学者。18歳から20年間、プラトンに就いて学ぶ)

アリストテレスは労働を、その社会的機能価値は承認しようといいうプラトン的な意味での「劣位の価値」であるとだけみなすのではなく、さらに徹底してその価値を「卑しい価値」として断するまでにいたる。

「最も立派な国制をもつ国、すなわち…無条件に正しい人間を所有している国においては、国民は俗業民的な生活も商業的な生活も送ってはならない…(というのは、このような生活は卑しいもので、徳とは相いれないからである)。また、最善の国の国民になろうとする者は、実際、農耕民であってもならない(何故なら徳が生じてくるためにも、政治的行為をするためにも閑暇を必要とするから)」

(アリストテレス『政治学』)

③ 古代ローマの労働觀

キケロは、ローマ軍への演説のなかで、「自由民にとって価値ある職業は、第1に農業、次いで大商業、このふたつだけである。だから諸君たちが、名譽ある退役後、そのどちらかに就き、郷土として地域平和に貢献するなら、大いに結構。他のあらゆる生業は野卑^(やひ)で不名譽なものであって、職人は小商人と変わらず、雇われ人は高利貸しと同じだ。なぜなら、こうした職業の人は、己の魂を他者の欲望に結びつけ、報酬に心を動かされるからだ」と述べている。

小結

- ①古代ギリシャ時代における労働主体は、客観的に呪われ、主観的にも卑しめられていた。それが論理的に自由な労働者、職人にまで拡張されて、彼らもまた等しく卑しい存在とされていた。
- ②「征服されたギリシャがローマを征服した」といわれているように、ローマはギリシャの文化価値を全面的に継承した。労働觀に関するところでもそうであった。

2-1 古代ユダヤ教の労働教義

- ・古代ギリシャ・ローマの政治的都市国家勢力に圧倒され迫害されたヘブライ人もギリシャ人同様に労働を呪われたものとしながらも、それを理念にまで高め、教義化し、道徳の観念システムを作り上げた(古代ユダヤ教・旧約聖書の世界)。
- ・つまり、古代ヘブライ人の労働に対する基本的な考え方が古代ギリシャ・ローマ人と決定的に異なる点は、「**なぜ、人間は労働に苛まれねばならないのか**」という問題にそれなりの理由(根拠)付けを行ったことである。それによって、消極的ではなるが、ある種の確かな価値と意義を帯びてくることになった。

①一般的観念(=神によってはじめから人間に課された課題としての労働)

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。」(「創世記」2:15、出典は『(新共同訳)旧約聖書』日本聖書協会、1987年、以下同)

②「原罪に対する罰としての労働」

「神はアダムに向かって言われた。お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなつた。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。」(「創世記」3:17)

③「神との契約としての労働」

「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事をしてはならない。…六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」

(出エジプト記 20:8)

2-2 初期(原始)キリスト教の労働教義

- ①初期(原始)キリスト教の労働観も、ユダヤ教的伝統(「原罪」に対する罰)を継承したが、その教義の上に一つの積極的・肯定的な意味を付与した。それは労働が**慈善の手段**と考えられるようになったこと、すなわち、「労働は、財を得て、それを必要とする兄弟たちと分かち合うためにも必要である、という見解を付け加えた」のである。その背景には「神の国」到来の予言が果たされず、「神の国」の到来が遠い将来のことであると考えられるようになったことで、人々の関心がこの地上の教会へと移り、「社会問題」をも看過することができなくなったのである。
- ②労働は、修道士の義務、修道院の必要を満たし、兄弟愛を育て、肉体と精神の悪い快楽を取り除いてくれる、と考えたアウグスティヌス(354~430、初期キリスト教会の教父・哲学者)は、「人間に損得の思いを宿さず、神から人間を引き離さない」労働を最高のものとした。当時、修道院での労働が持った意味は、苦行的、贖罪的肉体労働という表象の中にある。修道士は職業的に悔い改める人であり、使命として苦行を行う人であるが、この使命を全うするためには、最も低級とされる肉体労働(「罰としての労働」)をするのが最短の道とされた。

2-3 中世カトリックの労働觀

中世カトリックの歴史はすでに世俗的な価値を多く取り入れた歴史であった。この時代の代表的な思想家はトマス・アクィナスは次のように述べている。

「だれしも、親から子へと家職をつづけていくので、それぞれの身分階級に属さねばならない。だから、人はだれであれ、社会のある身分階級から別の階級へと移ることは許されない。そういうことになれば、社会の秩序が壊れるからだ。労働は、人間によってではなく、神によって組織された世界に、しっかりと、恒久的に適合しなければならない。**身分階級と職業は、神がこの世(社会)に現わされた人間の姿である。**それゆえに、人は、勝手にその教会を超えてはならない。これが、すなわち、労働の根本的な前提である。労働によって身分と職業がつくりだされるのではない。神が与え賜もうた身分と職業に服して、人は労働に就かねばならない。」

3-1 宗教改革と労働観の変化

- ・中世のカトリック教会の世俗化が行き過ぎ、宗教としての機能を十分に果たせなくなってきたために、「宗教改革」といわれる一連の変革運動が起こった。その代表者がルターとカルヴァンであり、彼らに代表されるプロテスタンティズムによって、人間の精神は革命的に変革を遂げることになり、またそれによって労働(職業)観も一大転換をとげた。
- ・ルターの「天職(Beruf:召命)」観念とカルヴァンの「二重(絶対予定説)」によって、労働に対する新しい態度も生まれてきた。人はすべて、富者であっても、働くかなければならぬ。なぜなら、働くことは神の意志だからであり、労働をする人間は自分の意志によって生きるのではなく、**神の栄光を地上にもたらすための道具ということしか、その価値をもたないとした。**労働する人間は、気まぐれに働くのではなく、方法的で、規律的で、合理的で、定常的で、したがって専門的な労働でなければならないとされ、職業(天職)を選び、徹底した自覚をもってその職業につくことは、宗教的義務であるとした。

3-2 ルッターの職業観

①ルターは商業活動を眞の労働として認めなかつた。

「労働の目的は、生計を維持することであつて、儲けることであつてはならない。だから、…生計をたてるだけで、それ以上をもとめてはならない。…[商業]これこそは、見よ！貧欲に起因を与え、地獄に向かって通ずる門と窓とを開くことである。…商業とは他人の財産を奪い盗むことにほかならないのである」(ルター「商業高利貸論」)

②ルターは「職業に貴賤はない」とするも、各人を特定の身分に留まり、それぞれに与えられた環境に無条件に適応すべきだとした。

「働くことで、出身階級を抜け出ようとしたり、社会的身分を超えて出ようすることは、神の掟に背く行為である。神は、すべての人間の、この世での位置を決めておられる。だから、神が人間に命じた位置にとどまる人こそ、もっともよく神に仕えるものである。(ルター「ドイツ国民のキリスト教的貴族に与える」)

③ルターの「天職」観念

ルターも中世的な観念に捕らわれていたことに変わりないが、ルターの独自性は以下の点にあった。

「各人の職業がいかなるものであれ、その職業が合法的なものである限り、各人がその職業に就いて勤労する労働形態は、人が神に奉仕する唯一の形態である。神に仕えるまさに唯一の最良の方法は、各人の職業労働を完璧に果たすことである」（ルター「ドイツ国民のキリスト教的貴族にあたえる」）

ルターによってはじめて、世俗的な職業に「神から命じられた使命、すなわち天職」の意義をみとめ、職業労働に人間の宗教倫理的な枠付けがなされたことは、特筆すべきである。こうして、ルターは、中世カトリックの思想を支配した世俗生活蔑視を打ち破った。その意味で、ルターの教説は革命的であり、実に重大な役割をはたしたもの、といわなければならない。

このように、ルターの教説は、労働が宗教的な威厳をもって前進する出発点である。同時に、近代（労働思想）への扉は、「宗教改革」期に、ルターの手により、はじめて決定的に押し開けられたのであった。

3-3 ルターとカルヴァンの教義(職業労働観の違い)

- ①身分秩序の維持を強調したルターの教えとはちがって、カルヴァンの教義は、出生來の身分や親の代からの職業に満足してとどまることなく、各個人に対して社会に「**最大の見返りをもたらす職業を探し求めることは、各個人の義務である**」と教える。
- ②地上に神の權威と聖意が満ち溢れるように、現世を拒否し、現世に生き、そのなかで働き、成功して、富者となれ！これがカルヴァンの教えである。そして、この教えこそ、働くこと自体を目的とし、節約を旨としながら、そして富を築くために働くといった労働のありようを進め、休息と快樂を憎む〈近代〉の基盤となるのである。

3-3 ピューリタニズムの労働倫理

ピューリタニズムは、カルヴィニズムから発展し、さらに徹底して、労働から最大限の利益をあげることは、一つの義務であると教える。成功は、利益によって立証され、その分選択された職業に、神が、その喜びを示す確かな「証し」である。

こうして、ピューリタニズムは、どういう職業であれ、それを「天職」となし、その職業に就いて無限大の利益をあげる途に門扉を開けたのである。それは、富者になるべき努力を、単に容認したばかりではない。それを聖化したのである。ここに、**富が、歴史上初めて、やましくない心と同化した。貧しさを願うことは、神の栄光を最大に侮辱することである。**

小結

- ①プロテスタンティズムの労働觀は、決して近代的労働觀ではない。それはむしろ古代的労働觀や原初的ユダヤ＝キリスト教の「懲罰としての労働」の単純な延長でもなく、古代・中世的な否定的労働觀の最終的で最も極端な形態なのである。
- ②しかし、プロテstanティズムの宗教運動が経済上の効果を發揮しはじめると、宗教的熱狂も「神の国」を求める情熱も衰え、ついにひとつの職業道徳にまで宗教倫理が後退していく。代わって宗教的色彩のない功利的現世利得主義が台頭し、労働への否定的評価が功利主義的な労働肯定へと転換する。
- ③資本主義精神の成立と同時に、ついに古代的およびユダヤ＝キリスト教的な格下げ労働觀、労働蔑視も終わりはじめる。その後は、「時は金なり」の標語の下に無数のベンジャミン・フランクリンたちが富の蓄積へと走りはじめるのである。

4 ルネサンスと労働 —「人間・労働」の賛歌—

宗教改革とならんで西洋近代社会の誕生の契機となったのがルネサンスである。人間再発見の時代と呼ばれている通り、思想は神中心から人間中心へと移り、それに従って「人間の概念(人間観)」も変わってくるのであった。ルネサンスの人間観の特徴は、人間を創造者、何かを作りだす者と考えていることである。そこでは労働は賞賛されるものであって、肉体労働もその一部として否定されるべきものでは決してなくなつた。このような考え方が18・9世紀にも受け継がれていくのである。

① トマス・モア(1478-1535)の見解

この「ユートピア島」には、ブラブラするだけの怠惰な人は一人もおらず、社会階級も存在しない。そこでは、すべての人が、代わり代わりにあらゆる仕事に就き、だれもが頭脳労働にも手職にも携わり、労働時間は多くてもせいぜい1日6時間程度をもってし、あとは休息にあてるか、好きなことをなんでもしても良いとされている。

② フラ・トマッソ・カンパネッラ(1568-1639)の見解

カンパネッラの『太陽の都市』(近藤恒一訳、岩波文庫、1992)が描く社会は、すべての社会階級を平等とみなし、みんなが労働者であり、喜びに満ち溢れている。なぜなら、そこでは、各人は、各人に適した仕事をもち、1日4時間以上は働く必要がなく、残りの時間は、だれであろうと、自由にして、思うがままに遊んでもよいし、勉強に費やしてもよいとされているからである。

小結

ルネサンス期の思想家たちは、「身体の訓練が心と精神の教導と相携えて行わなければならない」と述べている。たとえば、「太陽の都市」では、市民はすべて、各人の天与の才がどういうものか、また、どういうことに向いているものであるかをしっかりとわかるように、あらゆる技芸と科学技術の訓練を受け、あらゆる仕事をこなしたうえで、もっとも相応しい仕事につくのである。こうした考え方には、その後、発展して歴史的に根づき、近代的な「職業訓練学校」の成立を促すことにもなるのである。

① フランス啓蒙思想の二潮流（「歴史は進歩か退歩か」）

「歴史はひとつのデカダンス（仏：décadence、退落）の過程である。だから、人間が文明によって墜落するまえに、古き良き時代に戻ろう」と一方の学派が叫び、他方では「たわけたことをぬかすんじゃない!! おまえたちがうわごとのように繰り返し、絶賛して止まない古き良き時代なんて、人類の知る最悪の時代だ。歴史は進歩の過程であり、明日は常に今日より良いのだ」と応酬した。

労働に対する彼らの態度は、世界は向上していく存在か否かという大論争の、非常に重要な一面である。18世紀の思想家たちの態度は、およそ100年にもわたり続けられたその世紀の長い文化論争、すなわち「歴史は進歩か退歩か」ということに対する彼らの態度の違いに、正確に呼応する

ⓐ モンtesキーの見解（1689-1755、フランスの法律家・政治哲学者・啓蒙思想家）

彼が理想として抱えていた人間生活のありようは、自然（状態）に近い素朴で原始的な生活であったが、その反面、彼の心は「社会の改良」にも向けられていて、総じて、人間は進歩するという見方にも軍配を上げ、労働、豊かな暮らし、富の追求、などなど、文明を築く諸力と、その成果を讃えた。

③ J・Jルソーの見解(1712-78、フランスの哲学者・社会思想家)

ルソーは原始こそ完全で、無知にして幸せな「高貴な野蛮」という原理を褒め称えた。ルソーの考えた幸福な状態とは、余計なもの、贅沢なもの、富も金もない素朴な生活である。そのため、文明や文化は自然に逆らうものでしかなく、労働が複雑化すればするほど、それに伴って依存と不平等が、すなわち不幸が増大するという。

またルソーは、最善・至福の人間像として「独立自営の職人」を想定した。この職人は、農民とはちがって1ヵ所にとどまらない。抑圧されていると感じれば、独立自営の職人は、自分の道具を畳んで、他所に移ればいいと考えていたからである。

④ ヴォルテールと「百科全書派」の見解(1694-1778、フランスの啓蒙思想の代表的な存在)

ルソーとは鋭く対立したのが、ヴォルテールである。彼は、歴史は進歩の過程であると信じ、地上の楽園は、われわれの背後(過去)にではなく、前途(未来)にあるとした。そのため、都市を作りだし、都市によって作りだされる一切のものごとの、すなわち、仕事を求め、富を愛し、そして(人間がもっとも必要とする)余剰の贅沢、芸術、商業、産業を作りだす側に立って、彼の影響力を行使した。

また、百科全書派は、総じて、ヴォルテールに追従した。彼らの考えでは、人間の進歩にとって最も重要なこと、すなわち、その最大要素は、労働と科学であった。

② イギリス啓蒙思想の労働理論

イギリスにおいても、18世紀の労働思潮はフランスとよく似通っているが、理論的にはもう一步進んだものであった。

Ⓐ ジョン・ロック(1632-1704、イギリスの政治哲学者)

ジョン・ロックは、労働こそが、個人の所有権の起源であり、あらゆる経済価値の源泉であると説いた最初の思想家であった。ロックは、各人は生まれながらにして自分の身体とその諸能力に所有権を持っているので、その身体を使って行なった労働の結果が本人に帰属するのは当然だとして私的所有権を正当化した。このように、富の源泉である労働に高い価値をおいたのである。

Ⓑ デヴィッド・ヒューム(1711-76、イギリスの哲学者・歴史家・政治経済思想家)

「この世に存するものはすべて労働によって取得されます。そしてわれわれの情念がそのような労働の唯一の原因です」というように、労働と富を讃えた。

小結

- ・18世紀になると、労働に対する評価が高くなっていく。イギリスの古典経済学者アダム・スミスは勤労または労働の地位を上昇させて、「哲学」や「思索」と同格に扱った。これによって、かつて、天と地の距離があった精神活動と物質活動の距離がなくなった。このように、古典経済学が誕生は、労働を「古代的」偏見から解放し、積極的・肯定的・生産的能力として承認するまでになった。
- ・これまでの労働観の変遷について中間的に要言すれば、前近代の宗教的贖罪としての労働から、宗教的義務としての労働を経て、倫理的問題としての労働へと変化した。その後、近代になると、労働はそれ自体において非常に重要で、かつ権威を有するものだとみなされるようになってきた。そして、ついに人間は、その成功ないし失敗の原因を、労働のうちにみるようになった。

6 19世紀哲学における労働思想

19世紀は、労働の意義と理念をめぐる議論が、歴史上もっとも盛んになされた時代であった。この時代は、人はだれしも辛い労働に殉じて働くかなければならないという通念と、実際にみんなが額に汗して懸命に働く姿のいずれも、あまねくみられた時代であった。19世紀の思想家や哲学者たちは、人間の物質的、知的、精神的進歩の要因を労働行為に求め、労働を讃えるのである。

マルクス＝エンゲルスの見解

労働の聖化、絶対化はマルクスによって頂点に達したと言えるだろう。マルクスは『経済学・哲学草稿』のなかで、「労働は人間的自由の現実的表現である。労働することで人間は自由になり、労働の対象のなかで人間は自由に自己を現実化する」と述べた。

労働を解放できる体制になれば、労働はもはや苦痛を強いる搾取労働ではなくなる。そして、「生産者としての労働者」が自由に連帯して、労働手段を共同で管理し、共同体が必要とする諸々の財物を、自然の諸物を資材にして、不斷に作りだす自由な労働者からなる大きな社会—これが、科学的社会主義・共産主義（マルクス主義）の描く理想の社会である。

小結

- ①古代から続いてきた労働差別イデオロギーは、19世紀の広義の前期的「社会主义」運動の中で最終段階を迎える。労働と技術の肯定的評価の時代が幕を開ける。
- ②「資本主義的労働觀」も「社会主义的労働觀」も、労働を肯定するという点では同じ立場に立っている。二つの異なる経済思想が「労働の尊厳」を強調したこと、まさにそこから現代の問題が始まるのである。いいかえれば、「資本主義」のシステムイデオロギーを乗り越えると主張して登場した「社会主义」の諸思想も、「資本主義」以上に「労働の尊厳」を極端にまで引き伸ばしてみせた。
- ③いずれにしても、「古代的」労働觀が全面的に退けられたのは、19世紀であったことをとりあえず、確認することができる。労働觀史上の19世紀は「古代」の終わりにして、「現代」の始まりである。その意味で19世紀前半はわれわれの時代の出発点である。

① 労働信仰

近代人にとって、労働はすべての義務と美德を集約する行為である、とみなされた。だから、近代人の倫理的コードは、唯一条、「働く!」という教訓であり、それがすべてである。彼(女)らにとって、労働はもはや、呪われたものでも、神からの罰でもない。彼(女)らは、労働を通して、自らのなかに行為の神聖な原理を、すなわち「自由」を具象化する。

しかし、ハンナ・アレントが『人間の条件』なかで述べているように、現在の人々は何のために労働しているのかという労働の目的を知らないまま、必要に迫られて労働にすべての力を注ぎ込んでいる側面がある。そういう意味で、現代人が労働信仰の魔法にかかったままになっているともいえる。

② 「需要の無限戦線」

- ・資本主義以前の文明社会では、生産は、前もって分かっている量の需要によって決定されていた。ところが近代以降、そして今日ではますます、供給側が需要を当て込み、需要を発生させたり、それを意のままに操作したり、あるいはあおったりして、需要をどこまでも伸ばす**「需要の無限戦線」**を築き上げてしまっているのである。
- ・こうして、近代人は、生産・消費された商品の総量によって、国家の進歩・発展、つまり、その〈文明〉の程度を、そして、〈文化〉の程度さえ計るのである。そして、その総量が安定した伸びを示していると、彼らは、その国が健全に進歩、発展しているという。
- ・しかし、機械化された近代工場に数多く寄せ集められた労働者に眼を転じれば、決して明るい部分だけではない。多くの労働者は徹底した分業化のもとで、ますます単調な退屈労働を強いられる一方、工場での規律が秒単位に細分化されて、恐ろしく厳しい労働の服務規律体系が、労働者の肉体的疲労と心的負担をますます増加させていく。そして、このような状態が労働における歓びと明るさを消し去っていくのである。

8 労働のスポーツ化とスポーツの労働化

①労働信仰の揺らぎと「労働のスポーツ化」

すべての義務と美德を集約する行為としての労働が神聖なものと見なされていたが、いまや疲弊の極みに達し、それ自体が大きな危機に直面することになる。労働信仰の揺らぎを背景に、労働は、重要なことはゴール(目標なり目的)ではなく、プレーヤー(選手なり競技者)の技量を争う一種のゲーム(試合)のようなものへと、変質した。いわば「労働のスポーツ化」である。

②スポーツ熱の昂揚

20世紀初頭まで、生活条件において特權的な身分や階級・階層の人々を除いて、一般の人々は、大体において、体育や競技にほとんど関心を示さなかつたし、その余裕もなかつたという。ところが、今日ではどうか。今の日本の状況もそうであるが、「スポーツ新聞」は、巨大な出版物のひとつであり、政治・経済・社会の出来事や諸問題を扱う一般的な日刊紙にしても、ことごとくスポーツ欄を設けていて、読者にしても、まずもってスポーツ欄から読み始めるといわれるし、テレビ、ラジオでも他の娯楽番組と共にスポーツ番組は人気がある。また、学問の府としても体育大学があり、体育学部がある。これが現代の特徴の一つである。

③労働信仰からスポーツ・レジャー信仰へ

- ・労働によって疲れた心を癒すリクリエーション(憩い)として、人々の心のうちに捉え返されて浮上してきたのがスポーツ・レジャーであった。しかし、これがさらに反転して、働くことを自己目的とした労働信仰と同じ性格をもって追求される行為へと変わった。
- ・たとえば、近代スポーツの目的は、第1に、純粋に個人的な競技種目の場合、もっぱら古い記録を打ち破り、新しい記録を打ち立てることにおかれることとなる。そして、そのことを自己目的として、それを無限に追求するのである。これはまさに、近代的な観念としての労働が目的してきたことと、まったく同じではないか。

第2に、チーム・プレーからなら競技種目の場合、集団の勝利のために、個人を規律に従うチームの一員に変貌させる傾向を強く示すこれも、「分業と協業」からなる近代労働システムが築き上げてきたことと、さながらそっくりの傾向ではないか。

- ・ こうしてみると、現代人が手にしたスポーツ・レジャーは、労働で疲れた心身を癒す憩いと回復としてではなく、実際にはことごとく、労働に殉じた近代労働人の精神のありようと、そっくりの刻印をうけて出現しているものにほかならない、ということが了解される。

小結

- ①工場であれ、オフィスであれ、はたまた営業であれ、近代以降、今日でも、職業労働の現場は重いくびき以外のなにものでもないと、労働者（大衆）には感じられてきている。だから、彼らは労働から逃れて娯楽を求める、スポーツに走る。そうなれば、近代的な生活を構成する他の諸要因ともからまって、その思いはさらに強まる。
- ②スポーツに走るのは、労働者＝大衆ばかりではない。経済社会のエリート層にしても同様で、スポーツ志向に傾き、それを強めていく。なぜかといえば、彼らもまた働くことを聖なる義務とみなし、歓びそのものとしてきた天職人の末裔にほかならないからである。彼らも今や、企業活動・経営をゲームのようになし、そのゲームに全身全霊を傾け、生死をかけて働いている。
- ③今では何のために働くのかということが忘れ去られて、労働がゲームのように処理されているのであって、そのこと自体が自己目的となれば、労働とスポーツの違いは、単なる程度問題に矮小化していることになろう。

まとめ

労働觀の変遷の略図

古代からの労働一般の格下げ・蔑視

中世までは精神労働の優位

ルネサンス
人間を工作者
(*homo faber*)
と捉える。

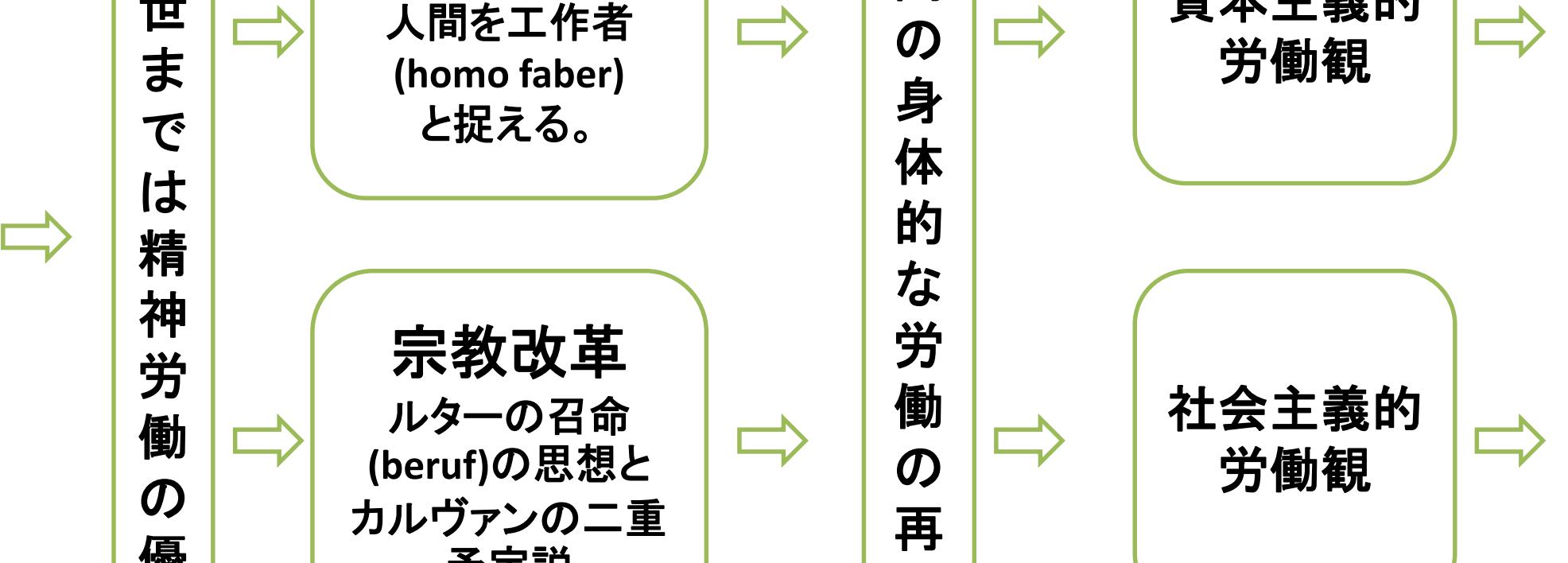
宗教改革
ルターの召命
(*beruf*)の思想と
カルヴァンの二重
予定説

人間の身体的な労働の再評価

資本主義的
労働觀

社会主義的
労働觀

労働の尊厳・労働信仰



「労働觀」変遷の要約

古代的労働觀

古代ギリシャから中世ヨーロッパを経て近代初期に至るまで

時期や地域によって多少の違いはあるものの基本的な特質は、労働一般を低劣なものとみなし、道徳的に非人間的なものと評価する労働蔑視の思想が支配的であった。

近代以降の労働觀は、労働を格下げと蔑視から解放し、労働を人間にとて肯定的なものと見なすようになった。すなわち、「経済人(ホモ・エコノミックス)」「労働人(ホモ・ファーベル)」という言葉に代表されるように、これまでの労働蔑視の終焉と同時に労働を「絶対的価値」または、「人間の自己表現のための核心的な行動契機」と見なすようになった。

近代労働觀